



## フィールド通信

# バラザでのおしゃべりを日本の大学に 菊地 滋夫

### バラザ——スワヒリ文化の英知

東アフリカのインド洋に面した港町なら、ほとんどのストリートにごく普通に見られるバラザ。「腰掛け」「ベンチ」はたまた「縁側」などなど、日本語ではいろんなふうに訳したくなる場所です。挨拶を交わしたり、コーヒーを飲みながらおしゃべりを楽しむ人。野菜や果物などの農作物を売る人。伝統的なボードゲームの一種であるバオをはじめ、カロム、チェス、麻雀などのゲームに興じる人。遊んでいる子どもを見守っている大人。なんとなく座っている人…。人々はバラザでおもいおもいの時間を過ごしています。

2006 年以来、わたしは明星大学の学生と毎年のようにザンジバルのストーンタウンを訪れています。フィールドワークという名称の授業の一環



写真1 バラザでコーヒーを売る人（ザンジバル）

ですが、何らかの調査を行うというわけではなく、学生たちは、身振り手振りを交えて、日頃学んでいる（はずの）英語を使ってコミュニケーションの実践に取り組むのです。つまり、あくまでも現地の人たちとの「おしゃべり」を楽しむことが主眼の授業です。

ザンジバルにはアフリカ系、アラブ系、ペルシャ系、それらの混血、インド系などの様々な出自を持つ人々が暮らしています。宗教的にはイスラーム教徒が 90 数パーセントを占めるとされますが、主流派であるスンナ派のいくつかの法学派に加えて、街にはシーア派のモスクもあり、さらには少數ながらヒンドゥー教徒や、大陸側から移ってきたキリスト教徒も共存しています。こうした多種多様な人々がゆるやかにつながり、ともに生きるコミュニティを形成していくうえで、バラザの果たす役割は小さくなかったのではないかと思っています。その意味で、バラザはスワヒリ文化の英知だ、とも言ってみたくなるのです。

### バラザでのおしゃべりで気づかされること

明星大学から毎年ザンジバルを訪れているのは、人文学部国際コミュニケーション学科に在籍する学生たちです。彼女／彼らはコミュニケーション論、異文化理解論などの学習を踏まえ、実践的な英語（または中国語）によるコミュニケーションを学んでいます。約 1 週間のザンジバル滞在中に最も多くの時間を割くのは、先ほど触れましたように、現地の人たちとの「おしゃべり」です。今日

の大学教育で盛んに取り入れられているプレゼンテーションでもなく、ディスカッションでもなく、ましてディベートでもありません。

おしゃべりの内容は、たとえばこんな感じです。

「どこから来たの？ 中国？ 韓国？」

「日本」

「日本のどこ？ 東京？ 大阪？ 熊本？」

「東京」

「学生？」

「学生」

「大学の？」

「大学の」

「何を勉強しているの？」

「あ…あ…英語」

「なんでそんなに英語が下手なの？」

「…」

「卒業したらどうするの？」

「あ…あ…英語の教師？ かなあ…」

「？」

「じゃあ、君はここで何をしているの？」

「サングラスを売りながら、自分で英語の勉強をしているんだよ」

「すごい！」

「家族を助けなければいけないしね」

「大変だね…どんなときに幸せを感じる？」

「こんなに素敵な道が続いている、いろんな店があって、コーヒーの香りが漂っていて、それにこんなに素敵な人たちに囲まれていて、こんな幸せの他に何を望めばいい？」

上記の現地の若者の最後のことばを聞いた学生は、どういうわけか涙が止まらなくなってしまったそうです。

担当教員としては、アフリカに対する偏った見方を相対化し、異文化理解を深めて欲しいと願って始めたプログラムでした。しかし、それ以上に学生たちが異口同音に語るところによれば、同世代の若者などとのおしゃべりを通して見えてくる



写真2 バラザでおしゃべりを楽しむ（ザンジバル）

人々の暮らし、つまり、経済的には豊かではなくとも、助けあいながら前向きに生きる姿は、教員の想像をはるかに越えて、学生たちの目にまぶしく映るようです。バラザでの出会いという経験は、学生たちが自らの生き方を顧みる重要な契機になりました。

### 学生たちを輝かせる環境

大学では眠そうにしていたり（バイトのしづぎ？）、浮かない表情をしていることが多い学生たちですが、なぜかザンジバル滞在中は信じられないほど活き活きとしていて、キラキラと輝いています。それはいったいなぜなのでしょうか。

様々な答えが考えられますが、わたしは最近こんなことを考えています。

徳島県南部のある町は、自殺大国・日本において極めて自殺率が低いそうです。この町で4年に渡って現地調査を行った岡檀さんは、つぎの5つの自殺予防因子を挙げています（岡 2013）。

- ・ いろんな人がいて良い、いろんな人がいた方が良いという価値観
- ・ 家柄などにとらわれない人物本位主義
- ・ 「どうせ自分なんて」とは考えない（自己効力感）
- ・ 悩みや困りごとはオープンに
- ・ ゆるやかにつながる（関心は持つが、監視はない）

わたしは、学生たちにとってのザンジバルはまさにこういう環境なのではないかと思うのです。

元からあるホスピタリティ精神と、観光産業が非常に盛んであることが相まって、ザンジバルを訪れるいろんな人は歓迎されます。地元にも様々な背景を持つ人々がいることが、肌の色や顔つきなどからもわかります。そんな「いろんな人」の一人として、自分が受け入れられていることを学生は実感します。

ザンジバルでは、家柄はもちろん、自分が通う大学の知名度や偏差値もいっさい関係ありません。

学生たちは英語をうまく話せない自分という現実に直面しながらも、同時に、ファシリテーション上手のザンジバルの人々に助けられて、意外とコミュニケーションが取れることにも驚きます。カタコトの英語かもしれないけれど、それでもちゃんと通じるじゃないか、それに何より楽しいし！

「旅の恥はかき捨て」ではありませんが、ザンジバルでは日本にいるときよりも心をオープンにして、いろいろと語り合うことができるようだ。不思議と日本人学生どうしの垣根も低くなる様子を見て取ることは容易です。

ある種の均質性を前提としたコミュニティであれば、そこからの逸脱は監視の対象となるでしょう。しかし、そもそもが多様である環境においては、互いの違いゆえに关心は持たれますが、「逸脱は許さないぞ」的な意味で監視されることはできません。学生たちは、そうしたゆるやかなつながりを楽しんでいるように見えます。

## 大学のバラザ化

### —学部学科横断クラスの初年次教育

ザンジバルを訪れる授業がスタートした頃、18歳人口の急激な減少に伴って、明星大学では入学者の学習意欲や学力の多様化が目立ち、離籍する学生も増加する傾向がありました。そこで2008年度後期より、新たな全学的初年次教育の検討が始まりました。たまたま検討委員の一人に指名されたわたしは、迷わず「バラザでのおしゃべり」をイメージした授業を提案しました。それは、約30

名1クラスに7つの学部の様々な学科の学生たちが入り交じり、互いに異なる思いや考えを語り合うところに重きをおいた授業です。1年半に及ぶ学内での議論と準備を経て、2010年4月より、70弱のクラスからなる全学初年次教育科目（1年前期）が開講されました（菊地 2013）。

クラスのなかでは、約6名ずつ5つのグループになって語り合いますが、メンバーは固定ではなく、多くの場合、3～4回の授業ごとにグループをシャッフルします。担当教員によっては、できるだけ多くの様々な学生と接することができるようとの配慮から、毎回シャッフルするクラスもあります。話題は各回でそれぞれ設定されており、まずは個人の考えをワークシートに記入し、それをもとにグループ内で話し合います。その内容を模造紙などにまとめてクラス全体に向けて発表する機会も度々設けられています。

こうして見ると、ディスカッションやプレゼンテーションといった大学教育におけるアカデミック・スキルの定番のような要素もあるわけですが（大学の初年次教育であれば、ある意味、当然でしょう）、そのベースにあるのは、あくまでも価値観や考え方が異なる者どうしの語らいであり、「おしゃべり」なのです。

たとえば、「とりあえず留学しようかなと考えているんだけど」とつぶやく国際コミュニケーション学科の学生がいれば、その存在は他の学生には大いに刺激になるようですし、教師を目指す教育



写真3 学部学科の異なる多様な学生が語り合う授業

学部の学生の存在は、将来の進路などは考えないようとしている他学部の学生にとっては自らを省みる契機となります。将来のことを考えていない学生でさえも、ガチガチに進路を決めてかかっていた学生にとっては良い意味で新鮮であり、別の視点から考え直す機会にもなります。

詳述する余地はありませんが、岡さんが指摘した5つのポイントは、この学部学科横断クラスにも驚くほど共通して見出すことができます。

まず何よりも、異なる学部学科に属し、異なる背景、異なる考え方を持つ学生が集まっていることが、学生たちにとって大きな価値として受けとめられています。上述のように、そうした違いが、新たな視野を互いに開かせるという効果をもたらします。したがって、学部ごとのいわゆる受験偏差値の開きなどは、ここでは問題になりません。単一の価値の物差しで測られる学力ではなく、学生の多様性が積極的に評価される環境にあるからです。また、こうした環境には、学生に「自分にも何かができるはず」と思わせる作用があります。さらに、1年前期だけの短い期間のクラスであるだけに、かえって何でも話し易いという側面もあるようです。関心は持つけれども、監視はしない、そんなゆるやかなつながりのなかで、学生たちは輝いているように思われてなりません。

少人数クラスや、そこでのグループワークへの評価は非常に高く、いずれも90パーセントほどの学生が肯定的に評価していますが、学部学科横断クラスへの評価を尋ねると、さらに数パーセントの数値が上昇します。岡さんの著書の書名をもじって言えば、学部学科横断クラスは、まさに「生き心地の良いクラス」なのです。学生たちが見せる活き活きとした表情は、明らかにザンジバルで見せるものに通じるものがあります。

この全学初年次教育科目では、初回と最終回の授業で無記名のアンケートを実施しているのですが、たとえば「学生時代にすべきことを考えていますか」との設問をはじめ、ほとんどの設問への回答は望ましい方向へと変化しています。この授業の導入から5年が経過して、大学全体の離籍率

は低下し、就職等の進路決定に関する数値は向上しました。

今日の日本の大学教育では、グループワークを取り入れた授業は急速に普及しつつありますが、いくつもの学部からなる横断的なクラス編成のもとで、入学動機や将来へ向けての考え方の大きく異なる学生たちが語りあう授業を1年生全員必修で実施する大学は一般的ではありません。それでも明星大学での取り組みは、近年、他大学にも少しずつ影響を与え始めており、首都圏のいくつかの私立大学では、学部学科横断クラスによる初年次教育を導入する動きがあります。

### むすびにかえて

アフリカと日本の関わりを考えたとき、「日本はアフリカに対して何ができるか」といった姿勢が一般的です。気がつくと、いつもわたしたちはそのような眼差しをアフリカに向けています。しかし、その逆はあり得ないのでしょうか。アフリカは、日本やその他の先進諸国から何かをしてもらうだけの存在なのでしょうか。

わたしはそうは思いません。スワヒリ文化の英知であるバラザのおしゃべりから生まれた授業は、間違なく日本の若者に良い影響を与えていきます。その進展が、今後の日本の大学教育にどんな力をもたらしてくれるのか、とても楽しみです。

Africa for Japan!

### 参考文献

- 岡 檀、2013、『生き心地の良い町—この自殺率の低さには理由がある』、講談社。
- 菊地滋夫、2013、「学部学科を超えた他者との対話が切り拓く地平—明星大学における初年次教育の取り組み—」『私学経営』、No. 465、pp. 17-22、公益社団法人私学経営研究会。

(きくち しげお／明星大学)